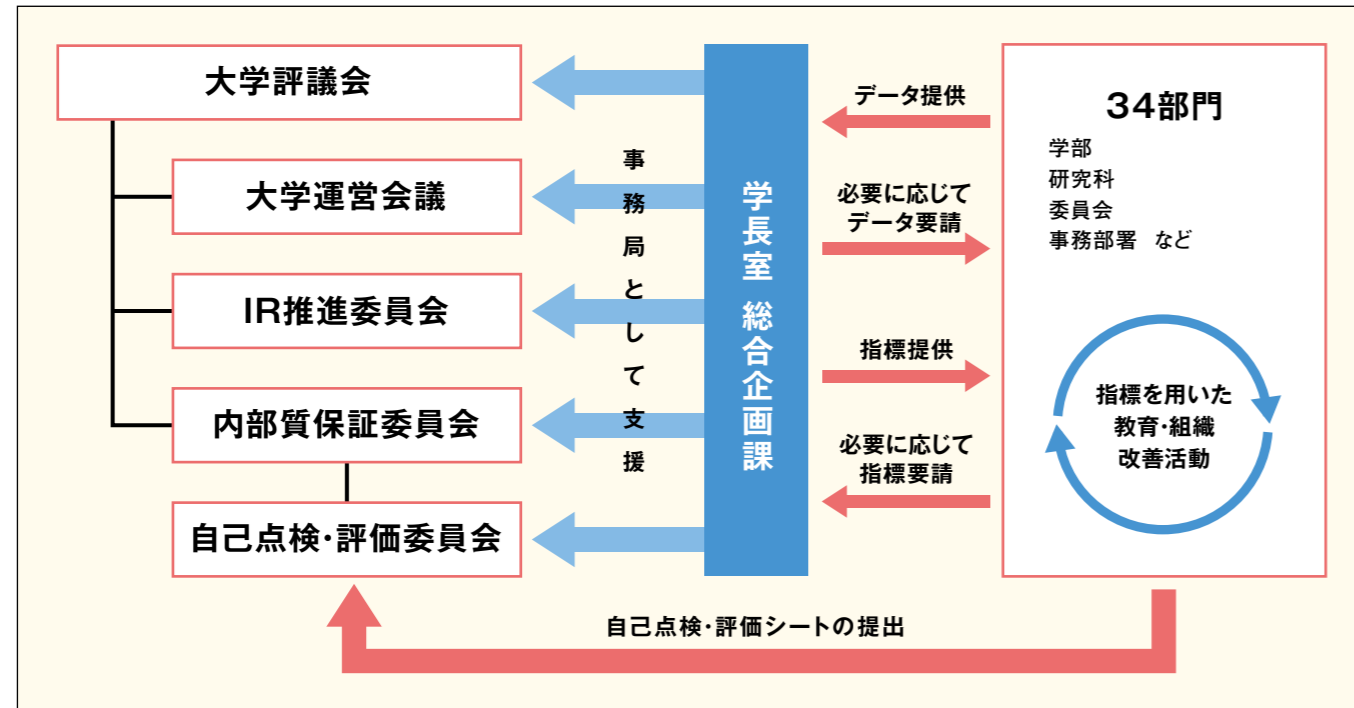




学生数/約7600人
学部/経済、経営、法、文、理工
大学院/経済経営、法学政治学、文学、理工学
▶THE世界大学ランキング日本版2021/121-130位

教学マネジメント推進体制図



*概略図。取材した内容を基に編集部で作成

PDCAを回す工夫

授業科目レベル	学位プログラムレベル	大学全体レベル
▶ 授業担当者が「授業評価アンケート」「成績評価」データを検証、評価して改善に取り組む。「授業評価アンケート」に対しては、各教員による講評とセルフレビューの記入を必須としている	▶ アセスメントプランに定められた測定手法により、AP、CP、DPの達成度を確認 ▶ 自己点検評価シートの作成を通して課題を洗い出し、改善に向けて動く	▶ アセスメントプランに定められた測定手法により、AP、CP、DPの達成度を確認 ▶ 各学科の自己点検・評価シートを基に自己点検・評価委員会等が課題を洗い出し、学長が「改善課題」を提示する

注目! 学修成果の可視化を目的に定められた収集すべきデータと扱いのルール

成蹊大学のアセスメントプランの正式名称は「学修成果の可視化に向けた具体的検証方法一覧表」。プランには、入学前後、在学中、卒業時(卒業後)に学生が「達成すべき質的水準」が、それぞれAP、CP、DPであると明記された。これにより各時期の教育がいかなる力の獲得をめざしたものなのか、学内の意思が統一されたことになる。そのうえで全学/学科/科目の3レベルについて、3つのポリシーの達成を検証するアセスメントをそれぞれ規定している。

可視化を行う組織を示した文章も付された。学長室総合企画課がデータの収集、加工を、各部署が分析や評価を行うという役割分担だ。「策定のきっかけは補助金要件ですが、今では教学マネジメントを進めるための“お墨付き”となり、それを推進する業務も格段に進めやすくなりました」と宮坂氏は語る。

アセスメントプラン(抜粋)

	入学前後 (AP検証)	在学中 (CP検証)	卒業時(後) (DP検証)
大学全体レベル (機関レベル)	〇	〇	〇
学科レベル (教育課程レベル)	〇	〇	〇
授業科目レベル (科目・授業ごと)	-	〇	-

学生調査(卒業時アンケート) 卒業生調査(3・5・10年後アンケート)
学位授与数 卒業論文/卒業研究
就職率・進学率 卒業論文/卒業研究のルーブリック
アセスメントテスト(3年後期) ※学科により任意

「学生の成長促進」を合言葉に データの生きた使い方を模索する

CASE STUDY

成蹊大学

3つのポリシーの見直しはもちろん、全学のデータの集積、アセスメントプランの策定…と、すでに「器」を整えた成蹊大学だが、次なる課題に直面。解決に向けて、職員が奮闘中だ。



学長室 総合企画課
宮坂 剛

みやざかたけし ● 大学卒業後、就職情報会社での約10年の勤務を経て、2011年に成蹊学園に入職。大学キャリア支援センターを経て、2018年より現職。大学の教学IRに携わる。

大学中のデータが集まり 活用の下準備は整った

私が所属する学長室総合企画課は、教学の重要事項を審議する大学評議会・大学運営会議等の運営に加え、2013年からはIRも担っています。現在は入試、教職、就職、各種調査結果など全学のデータを一元管理するまでになりました。

データ収集は教学マネジメント推進のエビデンスとして不可欠ですが、「大学としての説明責任を果たす」ことだけを目的にしている、各部署からデータを提供してもらおうとすら困難でしょう。本学でそれを進められた理由の一つが、目的を「学内データを生かした教学改善」としたこと。当初は新たな調査の企画検討を重ねていましたが、*1大学IRコンソーシアムの勉強会で他大学の事

就活時の自信につながる 可視化の方法を探りたい

次の課題は、いかにして一元化されたデータを教学改善に生かすかです。ただデータを提供しただけでは活用が進まなかったのです。まず「IR指標意見交換会」を各学部の教授会で開催。データの提供や加工のしかたについて意見を募りました。さらに、データの解釈やめざす育成人材像を現場のリアルな言葉で語ってもらう全学科の教員向けインタビューも実施。

例を見て、学内にはすでに多数のデータがあり、教学改善のヒントが詰まっていることを認識。個人情報収集ではなく教学改善が目的であることを全学に説明すると、データが集まってきました。

学長のリーダーシップの下、*2アセスメントプランが策定されたからは、「学修成果の可視化にはデータが必要だ」との全学的な合意が得られたので、逐一説明せずとも各部署からデータが提供されるようになりました。「学修成果をどう可視化するか」をアセスメントプランとして表現し、学内で共有しておくことは、教学マネジメントを加速させるために重要であると実感しています。

教育改善に必要なデータやその見せ方について示唆を得られました。一方で「理念はわかる。だが、目の前の授業を後回しにしてまでデータと格闘する必要はあるのか」という声も寄せられ、改めて教学マネジメントの意義や、日々の授業と両立できるしくみづくりの大切さに気づきました。理念を振りかざすだけでは教学マネジメントは進まない。どんな工夫があり得るのか、職員として視野を広げる必要性を感じています。

ただ、私たちと教員の間で言をまたず一致したのが、「学生の成長を促進したい」という思いです。学生の育成に無関心な教員は一人もいない。その事実がデータ活用に向けた突破口になりそうです。

教学マネジメントは、学生自身が学修成果を把握できるしくみづくりが鍵です。かつて「授業に力を入れたせいで就活が不安だ」と漏らした学生がいました。大学の学びでは成長できず、就活で評価されないとの誤解があるのです。学びによる成長に学生が気づいていない状態は、学生にとっても大学にとっても不幸です。授業による成長を学生が実感し、教員もその効果に自覚的になる教学マネジメントのあり方や職員としての関わり方を模索していきます。

*1 学生調査とIRシステムを提供し、IRコミュニティ形成も支援している一般社団法人 <https://irnw.jp>
*2 2019年度策定当初の名称はアセスメント・ポリシー

取材・文/児山雄介 撮影/荒川潤